

著者について

矢川澄子（やがわ・すみこ）

一九三〇年、東京生まれ。東京女子大学、学習院大学、東京大学に学び、現在、著述翻訳に従事。

著書：小説『魂とよばれた女』（筑摩書房）、詩集『ことばの国のアリス』『アリス閑吟抄』（以上、現代思潮社）、エッセイ『反少女の灰皿』（新潮社）『わたしのメルヘン散歩』（筑摩書房）『風通しのように』（新宿書房）

訳書：P・ギャリコ『雪のひとひら』（新潮社）、M・エンデ『サーカス物語』（岩波書店）、J・プリュノフ『ぞうのパパール』（評論社）ほか多数。

野溝七生子というひと 散けし団樂

（のみぞなおこというひと あらけしまどい）

一九九〇年一月二〇日発行

著者 矢川澄子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・一二一

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

© 1990 Sumiko YAGAWA

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

江苏工业学院图书馆
藏书章

野溝七生子 というひと

散けし団欒
(あけしまどい)

矢川澄子



晶文社

ブックデザイン 平野甲賀

野溝七生子というひと——散けし団欒 目次

マズハ鎮魂ノタメニ 9

孝行の経済学 23

光ト、闇ト。 45

どの効用について 59

NOW OR NEVER! もしくは別れの美学 73

救われない子供たち 87



詩と真実 101

内なる家 115

失われた兄たち

129

短歌とラグビー

143

新風のゆくえ

157

ある結婚否定論の結末

173

♪

散けし団欒

187

野溝七生子・鎌田敬止略年譜

203

あとがき

211

マズハ鎮魂ノタメニ

野溝七生子様

というより なアちゃん

なつかしいなアちゃん小母さん

と、ここはやつぱり昔ながらにそうよばせて下さい。野溝先生、でも、七生子小母様、でもどうも具合がわるい。あなた自身、ご自分のことをそうよんでいらしたのですし、表記もその流儀にしたがつて「なア、ちゃん」とね。聞く方の耳にはそれはほとんど「な・ちゃん」としか聞こえないほどの、かるいア、なのですけれど。そのなアちゃんのお声が二度ときかれなくなつて二ヶ月あまり。日本列島ではようやく桜前線が北の果てまでとどこうとするとところす。もつともわた

しのふだん過ごしている北信濃の山里では、こぶしの白い花がちらほらようやく目立ちはじめた程度ですけどね。

なアちゃん、いまごろどこで、どうしていらつしやる。天国へはもう着きましたか。それとも、行先はもしかして、もっとほかのところ？

そこは寒い、それともあたたかいの？ 風はあつて？ ひかりは十分ありますか？ もちろん、ぎらぎらまぶしいはずもないとは思うけれど、それとも、冥界などというからには、やっぱり薄暗いのかな？

ひとには笑われそうなこうした質問も、あなたになれば虚心に問い、そして虚心に答えていただけそうな気がいまでもするのに、今度こそあなたはほんとに遠くへ行つておしまいになった。声もまなざしもとどかない、遙かな彼方へ。そのうち病院をお訪ねしてみようかな、でももう思い出してもいただけないとしたら？ などと、愚図なわたしが思い迷っているうちに、現し身のあなたはどんどん弱つて行かれ、この世のあらゆる事どもにも徐ろにわかれを告げて。さいごまでくすぶり続けたひとつの執念——未発表の長篇『眉輪』をなんとか活字にすること——さえも、しまいにはもうどうでもよくなつていたのでしょいか。

訃報はやはり思いがけませんでした。

新聞にのつたあなたの死亡記事、ここに書き写しておきますね。これもまあ、いまとなつてはどうでもいいかもしれないけれど。

野溝七生子さん（のみぞ・なおこ）作家、元東洋大学文学部教授、本名ナオ）十二日午前七時三十三分、急性心不全のため、東京都西多摩郡瑞穂町の仁友病院で死去、九十歳。葬儀・告別式は十四日午後一時から横浜市戸塚区汲沢四ノ三二ノ六、宝寿院で。喪主はおいで宝寿院住職の野溝良尊（りようそん）氏。

大正十二年、福岡日日新聞の懸賞小説に応募した「山梔（くちなし）」で特選入賞して文壇にデビュー、代表作に「女獣心理」など。比較文学による森鷗外の研究もある。

（昭和六十二年二月十三日付、朝日新聞）

知らせてくれた瀧君と、それから岩切さんと、第一ホテルで落ち合ってお通夜に伺いました。あなたのためにこの三人が待合せるのに、新橋でここよりほかは考えられませんでした。

三年ぶりに見るお顔はまえより一回り小さくなつたようで、あまりにも穏やかでおとなしすぎるくらい。白晳の額がその分だけよい目立ち、それにしてもなアちゃん、ほんとに色が白かったのね。老いてもしみひとつないその額の白さはやはり只者とは思えませんでした。

さびしいのは、その下でかつては生き生きと動いていたお顔、物怖じを知らぬまっすぐなそのまなざしや、問わず語りにつきせぬ思い出を語ってくれたその唇がひっそりと閉ざされたまま、もはやどんな感情にもみだされぬ不動の静けさをたたえていることで、でもその傍ら、そうだ、

これでよかったのだと、なにかほつとする思いも一方にはありました。なぜって、晩年のあなた、とりわけ四年まえに優雅なホテル住まいから老人病院へ移られる前後、あなたの唇から漏れでたものは、かならずしも美しいせりふばかりではなく、時として聞く者の耳を掩わせるような憎悪や狂乱のさけびも多々まじっていたのですから。

なアちゃん、いかが。死はやはりある種の人びとにとっては究極の解放なのでしょうね。――

S園の子供たちのお葬式って、美しいのよと、いつぞや姉が語ってくれたのを思い出します。おぼえていらつしやるかしら、姉のところにも心身障害の娘があつて、なアちゃんも昔、抱いて、涙して下さったのを。その子のお世話になつてゐる施設の話ですけれど、ふだんから重症の麻痺や障害を背負い込まされ、生きているかぎりぎくしゃくと、引き攀れゆがんだ表情しか示せなかつた子供たちが、さいごに横たわつたときにはじめてあらゆる見苦しさから解放たれて、これをかぎりの安らかな愛くるしい素顔を見せてくれるのですって。

きこえていますか、なアちゃん、まちがつていたらごめんなさい。でもあの日、柩のなかのあなたの静かな寝顔に、ある大いなるものの手による「救い」を見たのははたしてわたしだけだったでしょうか。いいえ、そうは思えません。おそらくは身内の方々、なかんずくあなたと深く関わりあつた姪御さんのH子さんやRさんにしても、多かれ少なかれおなじ思いだったのではないのでしょうか。どんなに老醜をさらけだしてもいいから一日でも長生きして下さい、などと祈るのは、どうもはじめからあなたにそぐわないような気がしてなりませんでした。あなたに、とい

うよりあなたの美学に、です。

米寿を目前に控えての環境の激変は、急速な呆けのはじまりという、これはまたあまりにもお定まりのコースでしたけれど、そうしたいさいこの日々のお老残の面影は死とともにきれいに拭い去られ、ふたたび真のレディとしての往年の面目がよみがえったのでした。

このお顔が見たかったのだ、とわたしは思いました。いまならば、目さえひらけば十年まえとおなじように、呼出しにこたえてすたすたとホテルのロビーにあらわれてくださってもすこしもおかしくありません。そうして二人してとめどもないおしゃべりをして、それから千疋屋かブルックか、時には新橋から銀座まで国電下の抜道をたどって行ってごはんを奢っていただいたりもして(あのあたりのお店やビルの谷間の細道を、あなたは呆れるほどよくご存じでした)、おしまいはもういいからというのを先に立って地下鉄の階段をおりてきて、ホームへいそぐわたしに改札口からアウフヴィーダーゼンと、見えなくなるまで手を振って見送っていて下さった、あの頃のおすがたといまの静謐とのあいだに、大げさにいえば悪夢のような五年間がわりこもうなんて、当時はわたしたちのうちのだれが思いがけたでしょう。

この優雅で快適なホテル暮らしにいつか終止符の打たれる日がやってこようとは、正直いつてわたしにはほとんど予想もできませんでした。六〇年代末にいままでの係累をはなれて一人暮らしをはじめたばかりのわたしには、さしあたって「なアちゃんみたいな暮らし」はささやかな目標のひとつでもありました。でも、こちらはかけだしの筆一本で、なアちゃんみたいな錚々たる大学教

授のご身分とは経済的基盤からしてちがうのだから。でも——、と一度、あなたに直接たずねてみたことがあります。わたしもだいたい、月収三十万くらいになれば、小母さまみたいなホテル暮らしができるかしらん、と。その頃たしかシングルの部屋代は一晚五千円そこそこだったと思います。もちろんよ、できるよ、となアちゃんは大きくうなずいて保証して下さいましたっけ。なにしろ部屋代月十五万円として、光熱費も掃除洗濯費もいっさいかからないんだからね。朝は部屋でお湯をわかつて紅茶とパンぐらいですませればいいんだし、一日一食ぐらい外食したってたいたことない。人件費いっさい不要で、メッセーじもちゃんと受取っておいてくれるし、安心して留守できるし、足の便はいいし、——と、あなたはご自身多年にわたって経験ずみのこの暮らしの快適さをかぞえたててみて下さいましたが、なるほど、それでは月収三十万円（！）というのが、それからしばらくはわたしの到達ラインのいちおうの目安になったものでした。

なアちゃん自身、よほどの事情でもないかぎりこの暮らしを打切るつもりがないことは目に見えていました。そうではありませんか。もちろん別府だか由布院だかに理想的な老人ホームがあつて、いよいよよとなつたらそこへ、とかなんとか、そんな話題が口にはのぼせられることも時にはあつた。それからまた、あれはいつごろだったか、いまは書庫同然になっている久ヶ原の持家を手入れして、澄ちゃんどう、いっしょに住まない？ と誘つて下さったこともありましたが。でも結局のところ、そうした話はすべて絵空ごとで、なにひとつ実現にはいたらなかった。あらたな生活設計と取り組むには、なにぶんにも高齢、というより、四半世紀もつづきたいまの暮し